

近代英語協会第 29 回大会

— シンポジウム・研究発表 —

日時：2012年5月25日（金）

会場：青山学院大学

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

TEL: (新年度から代表番号はなくなりました。)



<A>

会場への地図は、最終ページに記載してあります。

近代英語協会事務局

〒732-0063 広島市東区牛田東 4 - 13 - 1

広島女学院大学大学院言語文化研究科 英米言語文化専攻米倉研究室内

協会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/mea/index.html>

(電話: 082-228-0386 (大代表) 振替口座 00810-9-5821)

「文法化と構文化」

司会：前田 満（愛知学院大学准教授）

講師：前田 満（愛知学院大学准教授）

講師：川端 朋 広（愛知大学教授）

講師：秋 元 実 治（青山学院大学名誉教授）

シンポジウム趣意書

愛知学院大学准教授 前田 満

1990年代後半の構文文法の急速な発展により、構文の共時的な性質についてはその主な特性が明らかにされてきた。反面、構文の慣習的な特性を考えると、構文の特性既述には通時的な視点が欠かせないはずだが、現時点において構文の通時の研究は共時的分析に比べてアンバランスなほどに乏しい。しかし、近年の多くの研究者が指摘するように、構文の史的発達—「構文化」と呼ぶ—の特性およびメカニズムの解明こそ、言語の本質を知るうえできわめて重要な手がかりになると思われる。このシンポジウムでは、このような問題意識に立ち、構文化のプロセスおよびメカニズムをいくつかの事例研究を通じて浮き彫りにしたい。また、近年の文法化研究の文献で盛んに論じられている文法化と構文の関係についてもとりあげる。

「構文化—その特性とメカニズム」

愛知学院大学准教授 前田 満

本発表では、本シンポジウムのテーマのひとつである「構文化」という史的発達について、その言語学的意義とその特性、そして構文化と文法化の関連について論ずる。本発表が特に注目するのは構文化のメカニズムである。まず、Bybee (2010) にしたがって、構文化のメカニズムを(1) 高頻度のコロケーションにもとづいた新規の構文フレームの生成(例えば、take a break や pick and choose のようなイディオム形成)と、(2) 既存の構文からの分岐(例えば、「be going + 目的節」の構文からの未来の be going to の分岐)に分類し、さらに後者のパターンに(2a) 顕著な構造的変化をともしないもの、(2b) 省略が関わるものという下位クラスを設ける。(2a) の代表例として、What a hateful person you are!のタイプの感嘆文、(2b) の代表例として、主節として用いられる様々なタイプの従属節構造をあげて論じたい。

Reference:

Bybee, Joan (2010) *Language, Usage and Cognition*, Cambridge University Press, Cambridge.

「Why 疑問命令文の発達と構文化」

愛知大学教授 川端朋広

Why don't you ~? という表現は、形式的には疑問文であるが、実際には「～してはどうか」という提案や、軽い命令の意味も表す。また、この用法には、より簡素な形式である Why not ~? という変異形も存在する。いずれの形式も、通常の規則から予測できない意味を持つという点では、構文文法で扱われる「構文」としてみることも可能である。本発表ではまず、これらの用例を各種の共時的、通時的コーパスから抽出し、その発達過程をたどる。具体的には、Why not ~? の方が歴史的には先行しており、必ずしも Why don't you ~? からの縮約という過程を経て生じたのではないということを示したい。また、構文化理論を歴史的な視点から適用することによって、現代英語におけるこれらの形式の関連性や意味的な差異についての説明も試みたい。

「構文化とイディオム化」

青山学院大学名誉教授 秋元実治

本発表では、構文との関係で発達したイディオムのパタンの中で、特に 'give+ NP + preposition' (例: give birth to) 及び 'be + Vpp + to-infinitive' (例: be expected to-infinitive) の例を取り上げる。前者の構文は 'give rise to' や 'give way to' によっても例証されるが、これらの構文的イディオムの発達を中英語から現代英語にかけて考察し、文法化の過程を経ながら、「構文化 → イディオム化」に至るプロセスを論じる。'be + Vpp + to-infinitive' の構文には 'be expected to' や 'be supposed to' があるが、ここでは前者の発達を考察する。この構文の発達は「能動態 → 受動態 → 構文化」の発達であると考えられ、この能動態と受動態の双方のパタンを持つ動詞も多い (believe, think など)。'be expected to-infinitive' の発達に関していえば、構文化はしているが、イディオム化には至っていないことを論じる。なお、この構文に関連して、'expect' の発達は必ずしも、一人称主語を取るわけでもないことなどから、「主観化」(subjectification) と相反する発達であることも併せて議論する。

司会 高知大学准教授 松原史典

1. 「英語史における定冠詞の発達について」

名古屋大学大学院文学研究科博士研究員 茨木正志郎

本発表では英語の定冠詞の発達について、①定冠詞が出現・確立した時期、②指示詞の統語位置、③定冠詞の発達過程の三点を中心に議論する。①について、Wood (2003) が提案している定冠詞の二つの基準に従い、コーパス調査より得られた結果に基づいて、定冠詞が出現したのは12世紀後半であり、確立したのは14世紀中であると主張する。②について、定冠詞は指示詞より発達したと一般的に言われているが、指示詞の統語位置は指定部か主要部かで意見が一致していない。ここではコーパス調査の結果より、指示詞は古英語からD主要部を占めていることを示す。③について、定冠詞の発達過程は、Hopper and Traugott (2003) の意味における分化 (divergence) と漂白化 (bleaching) による文法語から接語への文法化であると主張する。

References:

- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (2003) *Grammaticalization*, 2nd ed., Cambridge University Press, Cambridge.
- Wood, Johanna L. (2003) *Definiteness and Number: Determiner Phrase and Number Phrase in the History of English*, Doctoral dissertation, Arizona State University.

2. 「否定辞縮約の歴史をめぐる問題点」

愛知県立大学教授 中村不二夫

縮約形 don't, can't, won't, shan't は概ね17世紀の間に頻繁に使われるようになった。ならば、当然、doesn't, didn't, couldn't, wouldn't, shouldn't も頻繁に使われていたであろうと誰もが推測する。3人称単数主語に対応する縮約形や過去時制の縮約形もなくてはならないはずだからである。しかし、英語史の事実はそうではなかった。両者の確立時期には100年～150年の開きがあった。発表者は、この事実を、Nakamura (2011) において報告した。今回の発表では、不完全だったOED on CD-ROMの全例調査の結果も加え、その理由に迫る。さらに、Why don't you V?のような、否定辞縮約形を内包するいくつかの構文の確立時期について言及する。

Reference:

- Nakamura, Fujio (2011) "A History of Negative Contractions," Paper presented at the Historical English Word-Formation and Semantics Conference, Warsaw, December 2011.

司会 青山学院大学教授 中澤和夫

1. 「*It is me* vs. *It is I*—19 世紀イギリス小説における分布とその考察」

東京大学大学院総合文化研究科博士課程 中山匡美

現代英語では、*It is me* の形が普通であるが、Lowth (1769) や Cobbett (1819) などの 18 世紀から 19 世紀の規範文法では、*It is I* が正しい言い方であることが明記されている。しかしながら、文法書と実際の用い方のずれはままあることで、その点を考慮すれば、19 世紀にはこれら二つの形の使用に揺れがあったことは十分予想される。

本発表では、まず、19 世紀イギリス小説を資料に、*It is me* と *It is I* の分布を概観し、次に、それらの具体例を、統語的、社会言語学的、文体的など複数の観点から分析し、ふた通りの形の選択にどのような要因が関わっていたかを考察する。

References:

Cobbett, William (1819) *A Grammar of the English Language in a Series of Letters; with Explanatory Remarks by Michio Masui*, Nan'un-do, Tokyo, 1970.

Lowth, Robert (1769) *A Short Introduction to English Grammar; with Explanatory Remarks by Toshio Gunshi*, Nan'un-do, Tokyo, 1968.

2. 「曜日と日付の前の *on* の省略—アメリカ英語における通時的変化」

千葉商科大学教授 山崎 聡

現代英語で曜日の前の前置詞 *on* が省略されることはしばしば指摘されるが、*Sales in the quarter ended Oct. 30 rose to* に見られるような日付の前の *on* の省略の実態調査や、両者の *on* の省略についてその通時的な変化を調査した研究はほとんどないものと思われる。本発表では、限定的な語句を伴わない、*Monday (morning)* のような曜日表現及び日付の前の *on* の省略が、アメリカ英語において 19 世紀前半から現在までにどのように拡張あるいは変化をしてきたのかを、主に *The Corpus of Historical American English* を利用してみていく。調査から、通時的に、日付の *on* の省略が曜日の *on* の省略に比べてより特定のテキスト・ジャンルに偏るようになることや、日付の *on* の省略が先行する形で、省略形は文中の動詞の直後（とその近く）で用いられる傾向にあること等が明らかになる。

司会 山口大学教授 太田 聡

1. 「近代英語初期から 21 世紀にかけての「名前動後」の拡大」

中央大学准教授 堀田 隆一

本発表は、*récord* (n.) – *recórd* (v.) のような「名前動後」の強勢パターンが、近代英語の初期以来、現在に至るまで拡大してきた経緯を記述し、説明することを目指す。この問題についての代表的な研究としては Sherman (1975) などがあるが、どの研究も、初期近代英語に始まる名前動後の通時的拡大について、英語史全体の広い視野から、その過程や背景を論じたものとはいえない。本発表では、近代英語期を通じての拡大の経緯を中心に記述するが、同強勢パターンの出現と拡大を可能ならしめた近代英語期以前の歴史的条件についても考察し、また、21 世紀初頭の現時点までの拡大の推移にも言及する。

Reference:

Sherman, Donald (1975) “Noun-Verb Stress Alternation: An Example of the Lexical Diffusion of Sound Change in English,” *Linguistics* 159, 43–71.

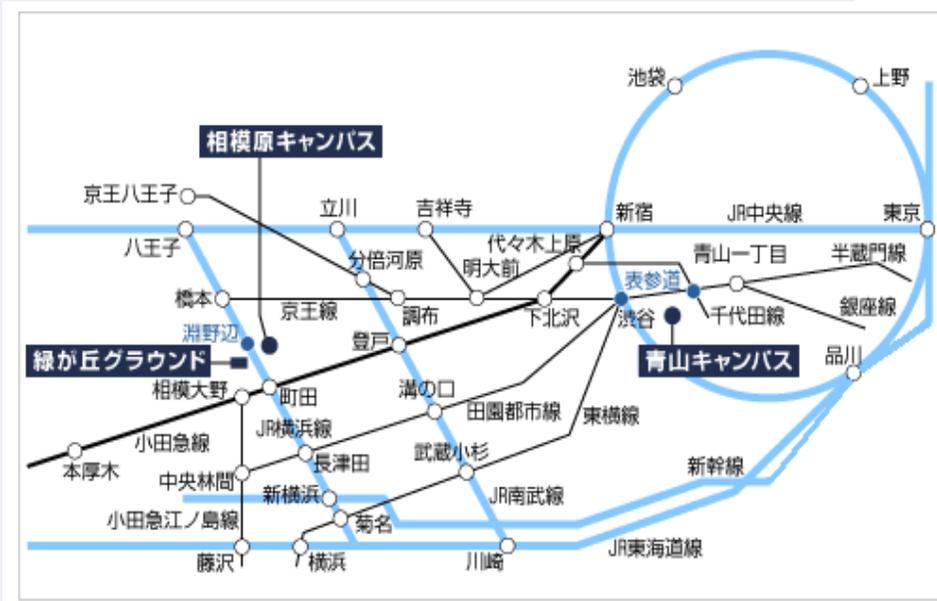
2. 「開音節における強勢母音の長化について」

聖徳大学教授 藤原 保明

2 音節語の開音節における強勢母音の長化の主な理由を Minkova & Stockwell (2008) などは語末の [ə] の消失に伴う代償長化とみなしている。しかし、代償長化の時期を [ə] の消失後と仮定すると 2 音節という制約に反し、消失前と仮定すると代償と矛盾し、長化と [ə] の消失は同時であると考ええると、長化の時期が遅すぎ、また、語末に [ə] が生じない OE *æcer* ‘acre’, OE *fædor* ‘father’, *cradol* ‘cradle’ などの長化を説明できない。さらに、この説に従うと、[ə] は後期古英語に出現した時ではなく中英語末に消失した時に初めて語の音量変化に関与したことになるなど、多くの問題を生じる。そこで、本発表ではこの長化は代償ではないという前提で考察してみる。

Reference:

Minkova, Donka and Robert Stockwell (2008) “4 Phonology: Segmental Histories,” in Haruko Momma and Michael Matto eds., *A Companion to the History of the English Language*, Wiley-Blackwell, Chichester, 29-42.



<C>



会場地図<A>、、<C>は、青山学院大学公式ホームページに掲載されている地図を利用させていただきました。ご好意に対し厚く御礼を申し上げます。